

## 第二の邪馬台国が大和国になった

塚田和正

### 1. まえがき

「邪馬台国」は畿内にあったとする論者には、「邪馬台国」が「大和国」になったとすることが決定的な前提にあり、そこに理論づけなど必要なかった。

「邪馬台国」は九州にあったとする論者にとって、九州の「邪馬台国」と畿内の「大和国」の結びつきを論理的に説明できれば、「邪馬台国」九州説を強力に裏付けられる。

筆者は3世紀に九州にあった「邪馬台国」と、8世紀に定められた畿内の「大和国」を結びつける鍵は「投馬国」の存在意義にあるとの結論に達した。

### 2. 「投馬国」の位置づけに疑問

魏志倭人伝に記されている「投馬国」について多くの論者にとっては、その存在意義は軽視され、その重要性が説明されてこなかった。

・放射説では、旅程の終着地が「邪馬台国」であれば理解できるが、なぜ「投馬国」を終着地として記す必要があったか、合理的な説明がなされてこなかった。

・順次説では、「邪馬台国」への経由地とした場合でも、2か月に及ぶ旅程では多くの国々を経由しているはずが、なぜ「投馬国」一国だけが記されているか、合理的な説明がなされてこなかった。

### 3. 「邪馬台国」と「大和国」を繋ぐ4つの仮説

筆者は以下の4つの仮説のもとに、論理を組み立てた。

仮説1. 「卑弥呼」は「投馬国」の王女であり、「投馬国」は「卑弥呼」の母国である。

魏の使節にとって、女王「卑弥呼」の母国「投馬国」は、「卑弥呼」が政をした都「邪馬台国」に次ぐ重要な立ち寄り先に位置付けられ、倭人伝に記されることに合理性がある。

「投馬国」が倭人伝に記される理由としては、これ以外の解はないと考える。

仮説2. 九州南部の「投馬国」と近畿にあった「畿内王国」（後の大和政権）とは3世紀以前から親密な交流があった。

仮説3. 「邪馬台国」は亡ぼされ、「台予」とその衛兵たちは「投馬国」の日向に逃れた。

仮説4. 4世紀半ばに、記紀に伝わる「神武東征」に相当する事変があった。

本論では、この「投馬国」は鹿児島県から宮崎県にまたがる大国と比定して、以上の定義づけをすることで、「邪馬台国」と「大和国」を合理的に結びつけることができた。

### 4. 「邪馬台国」と「大和国」を関係づける出来事

本論では、「邪馬台国」、「投馬国」、「狗奴国」などの国名は魏志倭人伝において使われた国名をそのまま用いる。実際には時代の流れとともに国名などは変わっているものと考えられるが、その流れを汲むであろうと考え、そのまま同じ名前を使って表現した。

### 3世紀以前

#### (1) 「投馬国」と「畿内王国」の交流

近畿南部西海岸と九州南部東海岸とは四国の太平洋岸を航路として3世紀以前より交流、

交易があり、その中でも近畿の大国の「畿内王国」と九州南部の大国「投馬国」の王族は姻戚関係にあった。

弥生時代には、「国」が形成されて2世紀初めには、九州南部には「投馬国」ができ、近畿中央部に「畿内王国」があったと推定する。この両国の間では四国の太平洋岸を經由して、盛んな人的交流があり、王家間で姻戚関係を持っていたと考えられる。この時代の盛んな交易が考古学的に証明されれば本推論の正しさが実証されるので、今後の研究に期待する。

### 3世紀初め

#### (2)「九州連合国」の王「卑弥呼」

「九州連合国」（中国名で倭国）の王に「投馬国」の王女「卑弥呼」が選ばれ、「九州連合国」の都があった「邪馬台国」で政を行った。「卑弥呼」には多くの従者や宮殿を守る兵士などが「投馬国」より付き従った。

### 3世紀半ば

#### (3)「卑弥呼」の親族「台予」

「卑弥呼」が亡くなり、その後「卑弥呼」の親族にあたる「投馬国」の王女「台予」が「九州連合国」の王として都のある「邪馬台国」に迎えられ、政を行った。

### 3世紀後半

#### (4)「狗奴国」の「投馬国」侵略

「狗奴国」が「投馬国」を攻め霧島連山の西側（鹿児島側）を奪った。投馬国の残る支配地は宮崎側一帯となった

#### (5)「狗奴国」の「邪馬台国」侵攻

「狗奴国」が「九州連合国」の都「邪馬台国」に攻め入ったため、連合国の王「台予」やその従者、都を守っていた衛兵などは、家族ともども母国「投馬国」の支配地であった宮崎の日向に逃れた。

「狗奴国」は仇敵「卑弥呼」の宮殿を破壊、「卑弥呼」の墓を暴き、その痕跡を消しきった。「九州連合国」の都であった「邪馬台国」は消滅、「九州連合国」は崩壊した。

### 4世紀初め

#### (6)「畿内王国」の朝鮮半島進出

「畿内王国」が中国へ独自の朝貢を目指して瀬戸内海地域を支配下に治め、崩壊した「九州連合国」の九州北東部の宗像を拠点として、沖ノ島経由で朝鮮半島との交流を始めた。

### 4世紀半ば

#### (7)「投馬国」系王子の誕生

3世紀後半に「投馬国」の王女が「畿内王国」の王に嫁ぎ、生まれた王子は次期王となるべく約束されていた。それまでは「畿内王国」の王は東国系が続いており、「投馬国」系の王が誕生することは「畿内王国」では初めてであった。

#### (8)九州平定

「畿内王国」は朝鮮半島との交流を盛んとするために、九州全土を平定する必要性から、九州と繋がりのある「投馬国」系王子が九州現地に出向き平定軍の指揮を取った。九州北部は平定され壱岐からの航路が確保されたことで、「畿内王国」と朝鮮半島との交易が盛んになった。

しかし九州南部の「狗奴国」系の支配地域（熊襲、隼人）の平定は難航した。

#### （9）東国系王子の反乱と鎮圧

「畿内王国」の都では、都に残っていた東国系王子が次期王となるべく反乱を起こした。

九州平定に当たっていた「投馬国」系王子は反乱軍を鎮圧するため、母の出身地「投馬国」の支配地であった日向に於いて、鎮圧軍を立ち上げた。

鎮圧軍には「投馬国」の兵や「邪馬台国」から逃れてきた元「九州連合国」の兵士などが加わった。よく訓練されていた元「九州連合国」の兵士が鎮圧軍の主力となって、瀬戸内海域で兵力を増強しながら畿内の都に迫った。

反乱軍は畿内の瀬戸内海側で守りを固めて待ち受けており、そこを破ることはできなかった。鎮圧軍は裏をかくて、熊野方面より畿内の都に攻め入り、都を取り戻した。

反乱軍は降伏、反乱を指揮した東国系王子の一族とそれに加担した豪族は全て亡ぼされた。

#### （10）第二の「邪馬台国」の誕生

鎮圧軍の主力として戦った元「九州連合国」の兵士はそのまま「畿内王国」の都の衛兵として留まった。この衛兵やその家族は、生まれ育った母国の「邪馬台国」を懐かしみ、近隣の山川に同じ名前を付け、その地域を「ヤマト」と称した。

#### （11）王の系譜の置き換え

「投馬国」系王子が「畿内王国」の王となり、それまで続いた東国系の王の系統は途絶えることとなった。これを機に「畿内王国」に伝わってきた王の系譜は、「投馬国」系の王の都合に合う系譜に置き換えられた（作り変えられた）。

### 8世紀半ば

#### （12）大和（ヤマト）国の誕生

3世紀の魏書に「倭国の都の所在地は邪馬台国」と記されたことが、7世紀の隋書にまで引用されていた。

7世紀までの「畿内王国」では、日本の中国名「倭（ワ）国」を嫌い「倭」を「ヤマト」と読みかえていたが、8世紀に「倭国」を「日本」と変えることを中国が認めた。

大和政権（畿内王国）ではそれに合わせるように、4世紀半ばから「ヤマト」と呼ばれてきた畿内の第二の「邪馬台国」の地域を正式に大和（ヤマト）国と定めた。

これは中国の史誌に合わせることで、大和政権が3世紀以前から続いている正統な政権であることを印象付けたかったことであろう。

### 5. 4世紀半ばにあった神武東征とは

記紀に記された神話の「神武東征」では、九州より皇子達が畿内に攻め入り、そこを征

服し、新しく都と定め大和政権に繋がる初代天皇「神武天皇」が誕生したとしている。

本論では、4世紀半ば「畿内王国」では異母兄弟による王位継承争いがあり、反乱軍鎮圧のため、「投馬国」系王子の鎮圧軍が九州から「畿内王国」の都に攻め入り反乱軍を鎮圧し、畿内王国で初めて「投馬国」系の王が誕生した。東国系の王の系譜を「投馬国」系に置き替えるに際して、この事変を畿内王国の初代王「神武天皇」の業績に当てはめたと考える。

## 6. あとがき

魏志倭人伝における「投馬国」の扱いについて、本論で論拠とする4つの仮説から、「邪馬台国」と「大和国」との関係について、以下の結論を導き出した。

「邪馬台国」で「卑弥呼」の宮殿を守っていた衛兵の後裔の軍団が4世紀半ばに、「畿内王国」（後の大和王権）の衛兵となって畿内に移り住み、故郷の「邪馬台国」を偲んでその地を「ヤマト」と呼んでいた。これが第二の「邪馬台国」であり、この名残が後世まで伝わり、ここが8世紀に大和国に定められた。

この畿内に移り住んだ第二の「邪馬台国」の衛兵たちは、最新の武具で武装した勇猛な兵士集団であった。兵士達は日本各地の反乱を鎮めるために、4世紀半ば以降に全国に派遣され大きな武勲をたてた。この兵士達は「ヤマト出身の武人」として「ヤマトタケル」の称号を得た。これが各地に伝わる「ヤマトタケル」伝説として残ったと考える。従って「ヤマトタケル」は特定の人物を指しているのではないと考える。

本論で論じた「投馬国」系王子は記紀にある「応神天皇」が相当すると考える。このことから「応神天皇」の母「神功皇后」は「投馬国」の王女であったことになり、年代的に「台予」と姉妹あるいは従妹関係にあったことが考えられる。「神功皇后」の活躍が九州の各地の伝説として伝わっているが、九州「投馬国」の王女であったとすれば納得できる。

この「畿内王国」の王となった「神功皇后」の子の「投馬国」系王子（応神天皇）にとって、「卑弥呼」は先祖に繋がる系列にあることから、「卑弥呼」を王家（天皇）の先祖神「天照大神」として祀ったとする説にも一理ある。

宮崎地方が「大和政権」の誕生に関わる神話が多く残る地域であるという事実と、宮崎地方が「投馬国」であり、「畿内王国」（後の大和政権）の王の系譜が、4世紀に「投馬国」系の系譜に置き換えられたとする本論には整合性がある。

本論の基本となる仮説の内容が完全否定されない限り、今後「投馬国」と「大和政権」とを結びつける歴史研究が盛んとなり、新しい歴史観が生まれることを期待する。

参考資料： 全国邪馬台国連絡協議会 私の「邪馬台国論」 平成30年

「完全順次式でたどる邪馬台国への道」 塚田和正

付表

## 邪馬台国と大和国を繋ぐ歴史年表

塚田和正

西暦	出来事
2??	「投馬国」の王女「卑弥呼」が「九州連合国」（倭国）の王となり、都の「邪馬台国」で政を行う
239	「卑弥呼」が「魏」に朝貢
249?	「卑弥呼」没
25?	「卑弥呼」の親族「台予」が「九州連合国」の王となり、都の「邪馬台国」で政を行う
266	「台予」が「晋」に朝貢
27?	「狗奴国」が「投馬国」を侵略 鹿児島側が奪われ「投馬国」は宮崎側のみとなる
28?	「狗奴国」が「邪馬台国」侵攻、「台予」と衛兵などは「投馬国」の日向に逃れる
28?	「狗奴国」の攻撃により「邪馬台国」消滅、「九州連合国」崩壊
29?	「畿内王国」（後の大和政権）の王に「投馬国」王女が嫁ぐ
30?	「畿内王国」北九州の宗像に進出、沖ノ島経由で朝鮮半島と交易開始
30?	「畿内王国」で「投馬国」王女に（「投馬国」系）王子が誕生、王位継承王子となる
32?	「畿内王国」が九州全土平定を開始、九州北部を平定し壱岐経由で朝鮮半島へ本格進出開始
32?	「投馬国」系王子が九州で平定軍を指揮中に「畿内王国」の都で異母王子が反乱を起こす
33?	「投馬国」系王子が日向で「邪馬台国」から逃れてきた兵士を主力とする鎮圧軍を立ち上げる
34?	鎮圧軍は「畿内王国」の都を取り戻し、反乱を起こした王子一族は亡ぼされる
34?	元「邪馬台国」の兵士は衛兵として都に残り、故郷を偲んでその地を「ヤマト」と呼んだ
34?	「投馬国」系王子が「畿内王国」の王（応神天皇）となる
351?	「倭」が朝貢？
366?	「倭」が百済と同盟
372?	「百済」が「倭」に朝貢「七支刀」
391?	「倭」が「百済」と「新羅」を属国とする
399～404	広開土王の碑 「高句麗」が「倭」を撃退
413～478	「倭」の五王の朝貢
527	磐井の乱
538	仏教伝来
600	第一回遣隋使
630	第一回遣唐使
663	白村江の戦、「倭」が朝鮮半島から撤退
702	遣唐使再開 唐が「日本」国号を認める
720	「日本書紀」国名に「日本」を使用、国の呼び名「ヤマト」（倭国、大倭国）は「日本」となった
757	国名「大倭国」の名は「ヤマト」と呼ばれてきた畿内の地方国名「大和（ヤマト）国」に当ててこ とで残された